

花の香り（冬-5）

中村祥二 会長

Cassie(金合歓)の芳香

研究所の香料研究室には世界中から集められた天然香料と合成香料が揃っていた。天然香料の中に Cassie というボトルがあった。Cassie の absolute は *Acacia farnesiana* の花から得られる。匂い紙につけてみると高級感のある香りがする。いつかこの香料を使ってみようという意気込みを感じた。しかしこの気持ちはいつしか、すっかり忘れてしまっていた。



Cassie (金合歓)

今回、あらためて園芸植物大事典を調べてみたが珍しいことにその名前が見つからない。600 種類あるというアカシアの仲間だということはわかったのにそれ以上進まない。

調べているうちに ネムノキ科アカシア属の常緑小高木で日本名は金合歓、学名は *Acacia farnesiana* L. 英名 Sweet acacia, 仏名 Cassie であるということが分かった。葉腋から長い花梗を伸ばして球状花序をつけ、芳香のある黄色い花を咲かせる、とある。

それではと苗を育て花を咲かせそして香りを調べてみることにした。花が咲くまで数年かかっただろうか。樹高 3m ほどになったアカシアは、直径 2 cm ほどの小さな丸い黄色い花を沢山付けるようになった。香りはフルーティ・パウダリーで持続性のある快いかおりを放った。枝ごと切り取った花は枯れにくく香りは長く持続した。開花した花を見るのには東京都薬用植物園（小平市）を 11 月に訪れるのがよさそうだ。

その後 Cassie を調べている内に 2 つの話キフィ KYPHI とカルメン（メリメ作）に出会った。今回はその話について書いてみたい。

1. 夢魔を追いはらう香りの処方にある Cassie

歴史を調べてみると人は夢魔に襲われて眠りを妨げられることがあった。フランクフルトの空港近くにある美術館でその様子を描いた絵はがきを見つけたことがある。安らかな眠りを手に入れるためにはいろいろな方法があるだろう。古く歴史を遡ってみると古代ローマの時代のキフィ (KYPHI) という処方に会った。眠りを誘う香りキフィの処方中に Cassie があるではないか。



夢魔（絵はがき）

古代社会の多くの原始宗教では、魔術師や祈祷師が、病気の治療や祭祀に香りのある木や樹脂類を使っていた。人類は、香りに神秘の力を感じ取っていたのである。夢魔は夜、寝室に現れて、人々を揺すったり、押さえつけたり、恐ろしい言葉を投げかけて眠る人々を苦しめた。夢魔が寝室に入るのを防ぐために人々は、香りのよい草や葉、枝、花を入り口や窓のところに掛けてやすんだ。すると不思議なことに夢魔は現れなくなり、眠りを快くすることができた。人々は、これらの植物の香りを夢魔が嫌って来なくなったものと考えた。寝室に漂うかぐわしい香りが人々の悩みを和らげ深い眠りに誘ったと解釈すれば、おかしい話では無い。

① 眠りを誘う香り

古代エジプト人は、そのような香りの効果について、すでに気付いていた。彼等が用いた最も有名な香料はキフィ (KYPHI) と名付けられていた。これは単一香料ではなくて幾つもの香料を組み合わせたものだった。この古代の処方はいくつか見つかっている。これらの芳香物質は、眠りを誘い、悩みを和らげ、夢を快くする。その成分はいずれも夜を心地よくするのが特色で効果が著しく現れるのも夜間である。

② 古代エジプトの聖なる香料—キフィ

キフィとは聖なる煙の意味である。古代エジプトでは、様々な儀式の際に香りを焚いたり、深い眠りをもたらしたりする為に香りを使用することが行われていた。古代ギリシャの学者によって紹介されたキフィの3つの処方ハプトレマイオス王朝に象形文字によって著されている、その製造方法も記されている。フランス人 Victor Loret の『Le Kyphie 』に詳述されている。彼は優れた古代エジプト考古学者としても知られている。なお、下記の論文はフランス語と象形文字が用いられている可成り難解なものである。

ギリシャ時代に紹介されたものはディオスコリデス、プルタルコス、ガレノスの3処方である。なお、ディオスコリデスは西欧の薬学の祖といわれ、プルタルコスはプラトンの流れを汲む古代ギリシャの哲学者であり、ガレノスは紀元2世紀に医学の権威と仰がれ、ローマ皇帝の侍医でもあった。Loret は彼の研究のまとめとして、再現を試みる人のために処方と製法を記述している。製法として、原料の粉碎、混合順序、熟成期間などについて指示している。その16成分は下記の通りである。

原料名	英語名 (原文には無い)
<i>Acasia Farnesiana L.</i>	金合歡(和名) cassie(仏名)
<i>Acorus Calamus L.</i>	calamus
<i>Andropogon Schoenanthus L.</i>	lemongrassorpalmarosa
<i>Pistacia Lentiscus L.</i>	mastic
<i>Laurus Cassia L.</i>	cassia
<i>L. Cinnamomum Andr.</i>	cinnamon
<i>Convolvulus scoparius L.</i>	rosewood
<i>Juniperus phoenicea L.</i>	juniperberries
<i>Lawsonia inermis L.</i>	henna
<i>Cyperus longus</i>	cyperus
Chair de raisins secs ,bien pure	raisin
Vin d'Oasis	wine
<i>Mentha piperita L.</i>	peppermint
Miel	honey
Myrrhe broyee finement	myrrh
Resine de telebinthe	turpentine

なお、ここでは詳述しないが、塩野香料の戸山孟生氏の助けを借りながら再現につとめた。重い粘着性の木のような香りを中心にして、やや涼し気で甘く軽やかな香りがそれを包んでいた。時間をかければもっと忠実なものにできるだろうか。

2 カルメン (メリメ作)に登場する Cassie

-----場面 2 -----

『カルメン』(Carmen)は、フランスの作家メリメ(Prosper Mérimée)が1845年に「両世界評論」に発表した、全4章からなる中編小説、及びそこに登場する女性の名前である。

舞台はNHKのテレビ番組「世界ふれあい街歩き」にも写ったかつての王立のたばこ工場だった場所で、現在はセビリア大学法学部の校舎になっている。ヨーロッパで最初に建てられたたばこ工場、メリメ作「カルメン」の舞台になったことで知られている。

ある孤独で誠実な竜騎兵ドン・ホセがカルメンという情熱的なジプシー女に振り回されたあげく、情欲のため犯罪に加担し、やがて破滅する。悪事に身を染めてお尋ね者となり、ついには死刑となる。ここでCassieは重要な役割を果たしている。

Cassie (Acacia farnesiana)の使われている場面。いずれも2章から。

口にくわえたアカシアの花を抜き取るなり、あの女は親指でそれを私にはじき付けましたが、生憎それが見事に眉間に命中したものです。なんとこれが、私には鉄砲玉ほど恐ろしかったものでした。……私はどこに隠れてよいやら分からなくなって、戸板のようにまっすぐ突っ立っているだけでした。あの女が工場に入ってしまったあと、私は自分の足のあいだに、アカシアの花が落ちているのに気づきました。どんな気持ちになったのやら分かりかねますが、とにかく私は、仲間に気づかれないように、そっとそれを拾い上げると、上着のポケットに大事にしまい込みました。これがわたしのつまずきの第一歩でした。

-----場面 1 -----

《あの女はいくつもの穴のあいた白絹の靴下をのぞかせる、真っ赤な短いペチコートをつけ、火色のリボンで結んだ赤いモロッコ皮のかわいらしい靴をはいていました。あの女は肩とシュミーズのあいだにはさんだアカシアの大きな花束を目立たせるために、かぶっていたマンティージャをうしろにはねのけました。あの女は別にアカシアの花を一輪、唇のすみにくわえていました。そしてコルドヴァの牧場の牝馬のように、腰をふりながら歩いていました。》



かつての王立のたばこ工場
現在はセビリア大学法学部の校舎になっている。
メリメ作「カルメン」の舞台になったことで知られている。

花の歌（アリア）

カルメンを愛しているドン・ホセによって歌われるアリアの通称である。冒頭の歌詞から「おまえの投げたこの花を」（仏：La fleur que tu m'avais jetée）の題名でも呼ばれる。

ドン・ホセがカルメンに歌う有名な愛のアリアである。

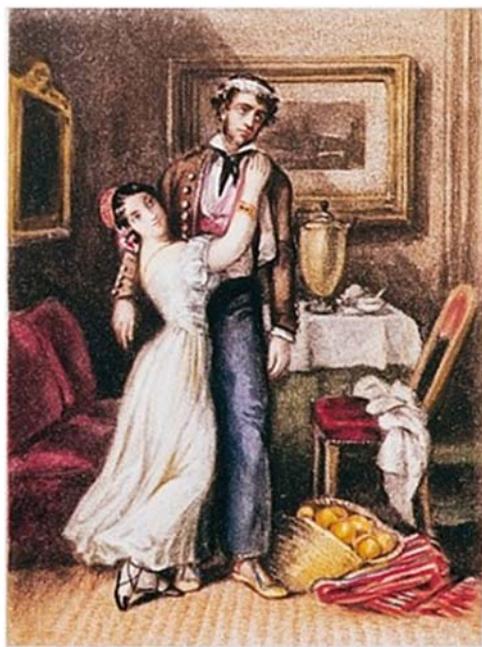
カルメンを逃がしたためにホセは監獄へ入れられたが、ホセは監獄の中で、彼女から投げられた花を枯れても大事にして、カルメンを想っていた。

おまえが投げた この花を
俺は牢の中でも手放さなかった
しぼんで ひからびてしまっても
甘い匂いは変わらなかった

何時間も 何時間も じっと
まぶたを閉じたまま
その匂いに酔いしれながら
闇の中で おまえを 思い浮かべた

原稿を書き終えて

メリメとローレは二人ともフランス人であり、それに色々な花や植物の香りに精通していた様子がうかがえる。それに。フランスは香料産業の盛んであった国であることからして二人とも香りに詳しくないに違いない。そして、19世紀のフランスでは花言葉が日常的に人々の交際において大切にされた文化が有る。メリメはcassieの花や香りはよく知っていたであろうし、その花の意味するところも心得ていたかもしれない。



カルメンとホセ
メリメ自身が描いた絵画

参考文献

- 1 Victor Loret , "Le kyphi, parfum sacré des anciens égyptiens", Journal asiatique, 10 (juillet-août): 76-132 (1887)
- 2 中村祥二：香りの世界をさぐる 1989, 朝日新聞社
- 3 メリメ：カルメン、堀口大学訳、新潮社、1972